戲作

山東京傳著

四書京傳餘師

豐後申シ

913.53
Sa629s

豐後

樂酒亭主

此長幕茶番而時語之不意氣席中

有隙日待夜來未茶飯食

人不聞而

乎

不喜不亦素人乎

土佐上下ふ外記涛半右羽織ふ義右股引豐後

うまひや丸探といひ〜八予ぞるぐはまとゐ前のうまひて今

国立国会図書館蔵書
国立国会
297.22
図書館
338452

い土佐ぶしも出ぬ外紀ハ勿論ぶしを流人あ一あまつさへ中あつさの半分もまでぶしを名絶さう義ちを夫を今ハ感ありとのつども是も好名好あり豊後ハきらいあ〳〵常盤津の津〳〵浦〳〵まで富本の末廣〳〵世の中ハ二流のところなところあ〳〵上ハ玉簾のうちよりを下ハ蔦張の芝居ハいつるまでかくらぶでといつかとあ〳〵彼方ハ横町ハ方の粉屋盛津富本ハ表れあき所ろ店子の娘の寒弾ハ大原の祝文が看経をさまたげる鳴物停止の浴室ハ湯屋の氣をいつるまたる岩屋梅屋渡竹あきるのよあんハ音声をうつまこと〳〵ふ

よるあるとも見のへきふ擂〳〵とまき擂〳〵ゆまでぶハ浄瑠璃の節あらそるぞう〳〵夜浄瑠璃ハ信長の時代小野の通女ぶ牛若丸浄瑠璃女のるを法〳〵ようあるうりるるり人の知るところなり〳〵極楽浄土ハ浄瑠璃世界といあり〳〵迦陵頻伽の義者でやい日夜浄るりを浄るり〳〵留るを居井息子ぶきろ或を年季ぶきろのたぐひまでハ世界すて重宝を酒をそぶきる車屋鮮とこのたふ識のお寺拍のもあるきを〳〵なり斯〳〵浄るり世〳〵ふるぶ芝〳〵今を用ふ是後節とふものの出来たるなり是ハやしけまども楽の余風あ〳〵人を和をる此業あり推

歌牧笛樂あらぎるとも一固うり要注節い文章ふ
色欲多く音声嬌乱あり去るまどもきとりどころう
ようてまんぎら姑のふ云る土の恵をを咲めいきしく
試ふ一ッニッをいそん言る尾臓悔とそよりつうねのなの名
をつひくとの文句あり曲礼ょ女子許嫁して笄而字
山落ふあくきり又おまの浮るり唯うるむひてあんも
いそぐとの文句あり詩曰奏假無言とはたぐひかわ
雲ふ又さる粧乃ふ思稽ふを去つらひ竹の管をぐれう
けくる浮るり礼記ょ雑泛泛野路梅と猿
山流あくく去つ一たり火とわ一ひとく来る二人の若いげを

も年季のとうくく一人い泛深のういをしてさらの
ふぬぐひを肩かけ一人い伊勢縞の布ふ格縞のあぐれ
をしめ見も角のつこうを深るをゆぐひをるふけいげ
きも湯ぐりとく人門口りそ伊八サア源助どんつらつ一
源助 マアききあへんらつせ 伊 ナンノかまうことわねさいい
へらつ一ふ 源 ヒーやアそどやくだらききあさいへへ
らつ一 伊 そんあら泛つ一小使と一ッやらつ一てト路傍の子供小づんもる
とあつのぐりやのうちうら モシそけ小使いありません 伊 ホーありやア出発
あせへ大ひらひぐトヌもあのどぶくそのあとを 板 あさんうもろ
板 どあくへ 伊 ヒつちサ 板 ヨヤ伊八さんうあぐんあせへる

伊サア源さまあがらつしやいト二人内へはいる内の方だてをうかがふ柳原の口の花のけいむかしやいとしやいとしやいと

あせへト源ゆうきのをとうくくとて赤まゆたくさんやく 伊ふ
わひをかぐをちやア赤まとるうちらア赤ぶ木まゆと
ふくらまる 梅 伊八さんあめく源明丹さく 伊 ゑんふあげるのざ
つけふこまくきやーたまごうとまるうどがあるトはごろまる
あづかのをもろくこのせのこのたまごこへうら
うくふひぬつたたまごだらけやあ南一をいづー 梅さんこりやアは男
ゲ弟でしるへの伊のサトだ 梅 おりやアのうのーの伊のあるト源まあ。
モレかくさんちようと弟ふかあてーやくーをあけ口ふうくくあくくちち
りぐ 母 おりやアのうおありがたふぶりやまモトきあうふきげん
ちやをうくーをーて二ツこんぐらる南一の 梅 伊八さんおろひ
ひりこんやのあいそうきろんのあり
おめくのめくをあてりやーた 伊 フウどまくの伊あまろる 梅

百川不孝ぐ伊のりくさ 伊 源日いぎーきんどあぐぎ
りやまて 梅 ゑまを居所のおあ合ぐゆんぐらいろうふさ内の
源ゆいたふりぐまくくとふ弟おを
きのくくてまてある梅こうぐ伊 梅 モレなんぐまーどめやせう
伊コウ 源まをまとのまろまんねく 源まいまくまの伊内
をまくまぐかりはまをくらはーどめくらんやこ源ぜんをふ伊り
きうろくうふのくくある梅ををくろくく老松をかくる
梅 抑松のめぐぐ伊る弟ふまくぐまと 源 口の内 ゆくくそめくく茄
ふまりぐくく伊とぐんぐくくふまぐれ 伊 コウ 源まくそりやア
あまぐやあんめくわぐぜ 源 ローやア又一富士二鷹三茄子
とのあらめぐくい茄ふうとかりつくさ 伊 くそりや ロうん
まうけんだ 梅 あだーそのあるをこらくきをあぐくとーくある
あるい紙同やの弟代 源 ロい上方若そ

ぢや中のやりもさいこよりとなたちのづつく出ぢよう三ぢんぐらゐのゆきふあるりもさんとりは仕ちまりどくろんもてやるまりけげいしやもけ男とてけるゆうてて行ぬやうにをりくひちをあてくとくゆるゐ行くたりふあるりこの内をよりとあーたちちゐ半六さてーア秘ちたどやナトゆく橋ぢさんうちちとけちんへドゆえりへくゐる半なんのいナけるんぢまよりいらんどや浮かんんたゆるあをとけてこうる半六伊八ふあのさいらんどやろろくく伊八もてこくしく火ぢちのそぢくぢきろ半こりやあんぢ出付ゆぐらどやとてるらひろんやくくどやかくきん炭とりかーそあくまんろ母半さんぐサア炭とり半とりとよりくおやぢさんいどこへのそどや母頭目藻おめりゆーた半きろい浮ぢの移ぐひゆうどやあそれどやのう極楽のさ行へゆ行ぢるどやらうぐ母それぢけふつくをけてるらうゐぐ

さトけいりやの母ごけ
ろうさふちゐまる 半 コウ
さんせトこひふをこぞそうあ
こうのさけのくいづ
やまそちゆうどあの子もやし
るぐら 半 ゐるゆうぐでぞるぐ
こをれあ　た姫のうちさん
んをあさるのんじやあ
くる拂もいろ〳〵あいそう
りふさりいかりてへ出る
本丁三丁目ホゞまう伸る
市人ふそう十毎ホトと云
おあんざアうわがあさらし
源 又あまものぞんいろ〳〵よあ

ねへけまやアいぐ 伊 そうちれ
ねやうこいそふもねへナトいそ
ちろのそ
ふらまび
あゝぶ勤の
ゐまろ
じやそまじやさんあちらも
じや 拂 まさんそれでも
まあんあちるそふぐね
しいぐマアそんなるいて
よあまものぞんきやしやう 半 ゐるいまるゐどつらひ

ゐ 母 もちつとまあ
あゝぶ勤の
ゐまろ
あまろうゐどかぶつさ
 拂 いて

幸いるんりんどやコリヤあのコトろくちがざうまきたぢへ
いせんうふヲットあるーやぐ〜拂冊にかくまそのうふーてせあるたく
まんどやゆらいうふさもんだんだんどやトうちうる見名ちてやいさる
で穢名去るでもるまぐまぐ落ち蕊者を一ッてんだりれ色
ちよだいちとうゆるありうゆ博奕の墓と女蕊者ハとろびし
ゆうぐ一夜検校の幸名ーーー

うつものあり去るまどゝもいかをとろくくこゝらふしぎ
べ死者をきうび

豐後畢

申

酒氣貧通

町頃城辛苦情凡十年

通子町馴染傾城馴染三會目

傾曰主不遠千里而來亦將有以見

艶書乎（床花反吐向人他女郎之文通子在懷中）

通子妄曰君何必曰茶終爲賢虛而

己矣（茶言虛也）

田の中ふ格のさそ立てるん甲う申うねを申う。柳のう

けづらゆゝしくとゝのびて花乃ごとく申上ゆゑとゝのもこゝなる
そもじゝの身の業なり。人なる万事さあるべき世をたゝりする
る中ゆゑもすめしすあるに流の身たゝうそのつゝこの常
ありとゝいへどもそのうちゆゑも実あるゝほもこゝわど古
らまぬのゝ。惜らまたわど捨ぐこゝにのなすおゝに
去ぬるこゝろ。大岸奉こゝのゆゑ花衣こゝの姫婦あり彼ぐ
宮ゆゑ冨士井田義吉こゝの驕沼あり。まこゝのひゆゑまゝ
ゆまこゝらまこゝろ。かのゆまこゝらまゝぬこゝまこゝぐこゝにこゝ
沼ゆゑ中と極まり。二人りゝ舟に深くれども。波舟の中獄
へ去のびまこゝ。水のゆゑぬゝにまこゝ。まこゝゆゑ胸のかゝまこゝを破

らんとせしに。お力のまの団ゆゑ無とこゝかゝるこゝのりゝ。ゝッ
とかりゝゝあたりをこゝれども。曙よりまこゝせのゝ石の地獄こゝる。
宮ゆゑのゆゑ。人らゝ知りのゝあゝ。初ゝ日まゝゝぐゝのかゝまこゝ
又力こゝりゆゑをせゝ。又ゝ無用とゝこゝけゝ。たゝこゝゆゑ石の地
ぞゝこゝそんこゝり。去人いびゝこゝ。中地獄さゝ日れゝいゝ中
しゝて去ぬるゝのゝこゝゆゑでも小浪でもなのゆゑ無用とゝこゝを
うけゆゑまゝゝいなゆゑゝこゝふんこゝうゝゝ地獄こゝる苦ゝ
ゝこゝらひたゝまひ。唱奉ゆゑゝやゝ九まゝゝや。こゝたゝちゝのゝこゝい今ゝ
九臣月ゝやゝひゝ。おゝまゝゝこゝあゝこゝい初ゝゝなゝひゝゝあゝゝ先の
世をこゝゝゝゝもゝあゝこゝゝゝ清ゝこゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ死ゝの

たびぢにおもむくまでもなく、をきやまをうらびみ給の
意化ぞやと思へども、それしんぐろの者とてのれど
今好色の世の中に、みのぐんまとてせず。一生連そへ女房
申ふ。腎虚して死ぬもそうもを送理は一ツ。又は金ぐ
たんと申ひとて。氣をうしなひて死或を合和して
金をうしなふ。ごとくに金ぐ仲とも閉つべ。ある
しかも女の道にくるしまれて順ず。世界の人皆を究
門より生れて又その為ふ死を見れば相ふうなのざる生
ぢやのと。定規枕をあたる居り為より。二ツ死命を
一女の為ふ捨。命死を自惜らしく難を形理ふさして

おもうるり法ぞ已ふ長く砂をたらす。濃うりの印
よろこぶこのあり。今時の仏弁ふもあらば惜ぐも
なく。性石角面友のむり死しまうれ乳あるむもこむとろ
いぶんで必ず。杉角ぶ。生涯き。おぞるをうる家ふ宝七三
勝が死ぶいむもしやおそりく和が仏弁いろ理じやあを
やどまでふ高の情をつくしたらう命も捨てあるこの。
ひとをとても捨てもいせねど素痴なるいより仏弁死
をうらやまうもじ。おぞのいぐまる仏弁いあ面むところが
根じや面名大の糞をふむきづひなけもべ高りの引
ぞうくいろふ弁ぶ一ッ財の英服。ぞのうぶりどうも

ひとぶどこ。ぞ。色ぶ弁ゆるあらぷ一ッ町行ことふ高
いおまとるぷ。ふうろふ高おうるりこのふりのありて。指
ぷ。今死ぬる身ぐ。ぶぐりあぐらゆくるぷいるもなり
ろさのよ弁ゆるなり。根ゆをつらぬひこあぐいるもかゆ
くも仏ともなく。鰹ふ毛穂をかるることきぐ面三階
ぐ休弁。いろ今の仏弁たきりんこのぐあくぐよふえ
るふ死ぐと切高で。ぞやぐのこるを必くいるなどおの
仏弁ぐふいくよのあらぐぐきこふ死ぐこぬりのを
きこ人ものあ。弁くこんる甘口ふゆるゆあらぐ。ぞんまふ死
ろわきろふさつぬのなるぐ。ひこんのむふんべろで

死ぬるいのちを惜まぬものの
道心をのさるべし。こ世あんどうのたねをまきふ
者のつとめなり。世ゆかねばならぬと自愛猶あて曰
くまこそ。為人是を愛し地獄どのそこるこいうこ
だうを菩ふさるべし。やうやうかしぎやうりんふ
死ぬとだうりいへり。生死の味ひあることひの情を
去らぬうらのみどうをぐそのみふるかこひ石ふ
あらまこそと懈怠まこそ地獄なるあるべどおまこそ
去らぐべこのこぶんむどやうるべひうこそこびいふ立て
ある安地義どやものおるふ相ぐうのあがおまこぐ

口。經卅のふぐらまたくようこ高旬いさろこ身の上をまこど
芽をこてこらまこてあまこけふい生の世の事いまこ大通どや
固人中の猿とのいとこてもひ世でい深まれぬのら。未世
ぐ契らふこのがいこころる。おこぐ和の事いこふそろち
ぐむふもせよ。見ぐろいあこふいならぬぐ。今まふある
ふどだふやここひこふまるひ。見身のむふ。見のちいいふのら
く接義の老ふいをこぐ。一和の枝ふ身をつるぐれ修羅
の陰ふ半閑しこ。おちの人女房どもとよびうを降さ人
なこ。ふころ去ッぷり暮るなすごいいこひもよらぐ。一又宮
邪の一毛ふより上この首尾ふく浄土へ往生まるあと

ありとも。産生男子とのあく。かあるとも女ぢたちまち男とるまべ。極楽にゆくからだまでゆらぬ事女が男ふ成ッたあらのあのぐわらふぞやとけちをつけたまつて。二人りハかどろ死ねいおくらくでハ女が男ふなりゆくとてもぢぐくいたのこあり。さるやあ世でも添ままぬ。きのらべ死でも差ケ死とてうちちゆるまべ地獄るまいくひらひをせあより名ひあ事くはたがゆ。邪ふ思惟をちくくくゆ事とゆんぐろふのくまへべ。あ人いゆりくとくふんーたがひふ小祇のちりをたらひ稽まあ。たカとも命をチャンとさゆふあきあ。そぐくるまへちるる地獄

るる祇うちなぐあ。あくいふくくさりのくゆ中死もこあるんあん。矢命ぐやと独つぶゆ死をこの蓮ゆふたちくりふ二人りが延命地獄る。利益あゆどぞあぐく死

申畢

京傳予誌大尾

自跋

夫洒落なる事難し。黄山谷が曰。周茂叔が人品甚高し。胸中洒落なること光風霽月の如しと是等を洒落の親玉と謂べし。然きべ世界に洒落悉皆洒落ならんに於ては乞子が去やまた本に不洒落なる事とまるまじ

明治十八年二月十九日飜刻出版御届
同　年　三　月　刻成出板濟

定價金三十錢

著者故人　山東京傳

飜刻出板人　鈴木金次郎
京橋區銀坐一丁目十番地

發兌製本所　伊勢屋金次郎
日本橋區通り二丁目一番地

東京地本同盟組合之章

東京府下大賣捌所並ニ諸國賣捌所左ニ

東京横山町三丁目　辻岡文助
同同二丁目　鶴聲社
同馬喰町二丁目　山口藤兵衛
同同町　辻岡龜吉
同両國吉川町　大黒屋平吉
同人形町通　武田平次
同人形町通大坂町　法木徳兵衛
同日本橋通三丁目　丸屋鉄二郎
同同通四丁目　金櫻堂
同青物町　自由閣
同日本橋通二丁目　大倉孫兵衛
同室町三丁目　秋山清吉
同淡路町角　巖々堂

東京京橋區南傳馬町二丁目　春陽堂
同同區南鍋町　兎屋本店
餘八府下書籍店并二繪草紙店ニアリ
大坂備後町四丁目　岡嶋支店
尾州本町二丁目　石版舍
熊本縣熊本　長崎次郎
鹿兒嶋縣鹿兒島　吉田幸兵衛
陸前石巻　三陸屋利平
仙臺大町四丁目　木村文助
阿波徳島　酒井万吉
越後水原　西村六平
同三條　樋口屋書店
信州長野　西澤喜太郎

東京大學藏